

Eureka VII

六年制通信 No.21 令和2年10月23日(金)号

諸君は紳士である

高校生の頃、北海道大学に憧れてどうしても恵迪寮(けいてきりょう)に入るんだと言って勉強していた友人がいました。恵迪寮は真冬に二階から裸で雪の中へジャンプするという謎の伝統で有名な寮です。どうも彼はそのジャンプがしたかったらしい。

高3の夏、大内山にある頭之宮四方神社にクラスで合格祈願に行ったとき、河原のほとんどの石に「〇〇大学合格」と彫られていたのを覚えています。焦った彼は川の向こう側まで飛び石をたどって行き、まだ何も書かれていない大きな岩に大きな字で「北海道大学合格」と書いたのです。自分の決意を見てくれとばかりに大きく。で、こっち側へ帰る途中、すべって川へ落ちまして。もうすでに「落ちた」ではないかとみんなで大笑いしました。記念写真に一人だけ裸足で写っていたっけ。

北海道大学、昔は札幌農学校、その初代教頭がクラーク博士ですね。あの **Boys, be ambitious!** で有名な。明治9年(1876年)に札幌農学校は開校しました。この二期生に内村鑑三と新渡戸稲造という二人の天才がいたわけですね。ご承知のように、幕末から明治にかけて、日本は近代化へ向けて西洋の技術や学問を積極的に取り入れる政策をとり、多くの外国人教師が日本に来ました。いわゆる明治政府のお雇い外国人ですが、日本の大学に招かれた教授の中では、東大のケーベル博士とラフカディオ・ハーン、そして札幌のクラーク博士が最も知られていますね。クラーク博士の方が先だったと思います。彼は1年間しかいませんでした。ケーベル博士は20年以上です。

日本に来る前、クラーク博士はMIT(マサチューセッツ工科大学)の教授でしたが、当時一人の日本人留学生と出会っています。同志社大学の開祖、新島襄です。明治政府にクラーク博士を強く推薦したのも新島だそうです。

私は **Boys, be ambitious!** よりも、クラーク博士の言葉で気に入っているのは「諸君は紳士である!」です。札幌農学校に着任したクラーク博士は、初代校長の調所廣丈(ずしよひろたけ)に校則についてレクチャーを受けるのですが、あまりに学生を束縛するような細かい取り決めで腹を立てます。ではどうしたらいいかと問われ、たった一言「諸君は紳士である!」、これだけで十分だと言ったのです。私はこのエピソードが好きです。漢の法三省ではないけれど、煩雑な規則は嫌いだね。行動の規範として「紳士たれ」というのは十分な重みを持つと思います。クラーク博士は「日本には吉田松陰という立派な教育者がいて、十四、五歳の少年も、これを子ども扱いせず丁寧に扱ったと聞いている」とも言っています。クラーク博士が吉田松陰のことを知っていたとは驚きですが、実は『宝島』を書いたスティーブンソンが吉田松陰の伝記

を書いている、それをクラーク博士は読んでいたらしいのです。面白いですね。

四大綱の「相手に敬意を持つ」、これも紳士的な振る舞いです。具体的にこうなさいという煩雑な取り決めはここにはありません。相手に敬意を持つとはどのような言動を指すのか、そこは君たちに任されるわけです。いい教育ですね。

紳士、紳士と男の話ばかりではいけませんから、ジェントルマンからレディに目を向けましょう。レディについてどうしても思い出すのはオードリー・ヘップバーン主演の有名な映画です。映画「マイ・フェア・レディ」は、きちんとした発音と言葉づかいのできない花売り娘が偏屈な言語学者の訓練によってレディへと変貌をとげる物語ですが、主人公イライザがこんなことを言います。いつまでたっても自分を一人前のレディとして扱ってくれない言語学者に「レディかどうかはどのように振舞うかではなく、どのように扱われるかなのよ。レディとして接して下さる方の前では私もレディとして振舞えます」と、映画の終盤で毅然と言い放ち、傲慢な言語学者を遣り込めるのです。(バーナード・ショウの原作ですから面白いよ。一度観てごらんさい)

さて、クラーク博士も「マイ・フェア・レディ」もジェントルマンやレディは、そのように接することで育っていくという考え方で共通しています。自覚を促し相手を信頼する教育環境とでも言うのでしょうか。素敵だと思いませんか。もちろん、ジェントルマンになりたい、レディになりたいと思わないといけなんでしょうがね。

今週のおすすめ

・ 帯木蓬生 『ネガティブ・ケイパビリティ』 (朝日選書)

副題が「答えの出ない事態に耐える力」。**Negative Capability** を直訳すると「消極的な能力」なんですかね。医学用語としての **negative** は「陰性」ですが、でもこれではよくわからないですなあ。ま、副題の解釈としておきましょう。

早急に答えを求めてはいけないということは、私もこの通信で何度か書いてきました。私は恩師に「先生というのは最後の答えは言わないものだ」、つまり自分で考えろと言われてきましたから、答えはすぐに手に入らないものだということを、あるいは何十年も疑問を抱き続けなくてはならないことを教えられました。恩師の言葉は正しいと、本当にそうだと思っています。恩師は **Negative Capability** という言葉は使われませんでしたけど。この言葉は何と夭折の天才詩人キーツが初めて使ったとのこと。しかも詩の中ではなく弟への手紙にただ一度だけ。それを精神科医のビオンが見つけて紹介したらしい。著者は運命的な発見と言っています。

帯木さんは精神科医でもあり『閉鎖病棟』(これ確か映画化されましたよね、観てないけど) など多数の著作を残しています。まだ現役のお医者様ですね。

さて、この本の第9章が「教育とネガティブ・ケイパビリティ」なのですが、そこに「お前たちは、他人のゴールに絶対辿り着けない。お前がテープを切れるのはお前のゴールだけだ」という言葉があります。ネガティブ・ケイパビリティと直接関係ないのですが、若い君たちに贈りたい言葉なので、先に紹介しておきます。

BGM は ビートルズ の *Hey Jude* でした…。